

伝承講演会

「歌舞伎」に親しむ

7月15日(土)、めぐろパーシモンホール小ホールにて、歌舞伎俳優・中村京蔵氏を講師に招き、歌舞伎の見どころの解説、ミニ公演を通じて歌舞伎の魅力をお伝えいただきました。



「藤娘」ミニ公演

三味線とお囃子の音とともに、ほろ酔いになった若い娘が妖艶に舞う。これは、歌舞伎の女方舞踊の代表的な曲目「藤娘」の一幕、藤音頭のシーン。藤の花の精が町娘に化身して、恋の楽しさやうれしさ、切なさを踊ります。今回の歌舞伎レクチャーは、中村京蔵氏による「藤娘」のミニ公演からスタートしました。

歌舞伎においてひとときわ目を引くのが、女方の衣裳。ミニ公演の後には、曲目に合わせ、藤の花のデザインをあしらった着物や帯について衣裳の担当者より解説がありました。また「藤



衣裳方による早変りの仕掛けの解説

娘」の見どころとなる「引拔」という早変りの仕組みについてもご紹介いただきました。あらかじめ上下に分かれている着物を糸で縫い付け、帯で隠す。引拔の際はその糸を抜くことで、素早い着替えを可能にしていると教えていただきました。



床山によるかつらの解説

た。また女方がかかるかつらを担当する床山と呼ばれる方からも、時代背景に合わせた髪のかき方、かんざしなどの装飾品について解説がありました。舞台上に立つ俳優だけでなく、衣裳、床山など、さまざまな裏方の存在があるからこそ歌舞伎は成り立っています。

歌舞伎の成り立ち

ミニ公演、衣裳解説の後には、歌舞伎の成り立ちについての解説がありました。歌舞伎は徳川家康が江戸幕府を開府した1603年頃、出雲の阿国という女性が戦乱の世で亡くなった死者の魂を鎮めるために踊った念仏踊りが起源だと言われています。当時はその踊りが目新しかったことから、前衛的な、常軌を逸するという意味の「かぶく」という言葉が変化し「歌舞伎」と名付けられたと解説がありました。また歌舞伎は本来女性がおこなったのですが、風紀上の問題から禁止になり、次第に青年男性のみのものへと

変化。そのスタイルが発展して今日に至っているそうです。

他にも歌舞伎と切り離せない三味線の存在についても語られました。三味線を使うことによって、能や狂言にはなかった豊かな音楽性をもたらし、歌舞伎としても発展していったと説明がありました。



藤娘のうしろ姿 (ふの字帯)

のつま先が内側に来るようにという指導がありました。レクチャー参加者の中から代表して2名の方に実践していただきましたが、姿勢を保つだけでも難しく、女方を演じる俳優の技を身をもって感じました。また感情表現についてもさまざまなケースを例に出して解説をしていただきました。泣きの演技の際には、お姫様や若い娘の場合は袖を使って涙を拭う、奥女中や武家女房は泣き紙とよばれる紙を使って顔を隠すなど、演じる年代や立場、時代背景によってどのような演技方をするのかということを、詳しくご紹介いただきました。



笑いの所作



泣きの所作

海外での公演経験

その後、34カ国60都市以上で公演を行った思い出を語っていただきました。特

女方の演技

女方のスペシャリストである中村京蔵氏より、女方の演技について実演を交えながらご紹介いただきました。男性の骨格を女性らしく見せる工夫として、上半身は左右の肩甲骨を合わせ、肩の力を抜いて胸を張ること。そして下半身はひざとひざをくっつけて、歩くときは出した足



女方の所作指導



女方の所作を体験



長唄「藤娘」の舞

制作協力：(独)日本芸術文化振興会 国立劇場